

長崎浩齋と新発見の「蘭東事始」について

津田進三

杉田玄白の「蘭学事始」の古写本は、現在のところ「蘭東事始」と題するものが七冊と「和蘭事始」と題するものが三冊との僅か一〇冊が知られているのみである。このたび富山県高岡市の長崎家御秘蔵の「蘭東事始」をみることに出来たので、ご報告したいと思う。(以下本写本を「長崎本」と仮称する)

本写本は筆者が昭和四一年に金沢市立図書館に発見した「金沢本」の祖本と思われるもので、金沢本と全く同じく表紙裏には「原名蘭学事始、磐水先生去学字、加東字日蘭東事始」云々、という長崎浩齋の書込みがあり、「蘭学東漸事始」としなければ意味不明であると述べているが、更に長崎本では題箋にも訂正を試みている。

長崎本で最も重要視されることは、次のような奥書があることである。即ち

磐水先生使塾生写之以見寄贈健

維普文政三年庚辰九月

と記されており、杉田玄白が蘭学事始を脱稿した文化二二年から僅か五年あとに筆写されたもので、筆写年代の判明しているものでは最も古いものである。

更に又これは大槻玄沢が直接命じて門人に筆記させたものであり、従って大槻玄沢所蔵のものと同じと考えられるので、この時

点では題名は蘭東事始があり、玄沢の序文はついていないわけである。

尚又この文政三年の五月に浩齋は杉田玄白の三年忌のために江戸に出ているので、恐らくこの時に「蘭学事始」をみる機会があったものと思われ、「原名蘭学事始……」となったことと想像される。

杉田玄白を深く尊敬していた長崎浩齋は、本写本を得て直ちに「杉田玄白先生小伝」を草してその上巻末に書き加えている。尚又、大槻玄沢と杉田立卿に学んだ浩齋には「浩齋医話」、「蘭学解嘲」などの著書がある。